

広場の政治性 ―古代マヤ都市エル・パルマールを事例として―

日本学術振興会特別研究員S P D

青山学院大学 文学部史学科

塚本憲一郎

(つかもと けんいちろう)

古代マヤ都市における広場

マヤ地域にかぎらず広くメソアメリカ文明における考古学調査では従来、王権を象徴する神殿ピラミッドや宮殿などの建造物に関心が集中する一方、広場はその重要性が一部の研究者によって指摘されていたにも関わらず、あまり着目されてこなかった。何もない空間としての広場から効率的にデータを収集し、人々の営みを復元するのは難しいという常識も、広場軽視の傾向を助長したようである。しかしこれまでのセトルメント・パターン研究は、マヤ地域の都市群において、中心部のみならず周縁に点在する建造物グループ群にもつねに複数の広場の存在を明らかにしている

(Becker 1991 など)。近年のメソアメリカ研究によると、前 1650 年頃には共同体の成員を多数動員して大広場を建設した事例が報告されており(Clark 2004)、マヤ地域においても、前 1000―前 850 年頃に広場が建設された(Inomata et al. 2013)。古典期(後 250―900 年)になると、マヤ諸都市の中心部に設けられた大広場は、都市の総人口を一度に収容できる機能を有し、王権のイデオロギーを敷衍させるために、その広場において大観衆を前に劇場型の儀礼を行っていた(Inomata 2006)。つまり広場は普遍的な建築要素であり、人口の大多数が参加する古典期マヤ都市における儀礼は、ごく少数の王族だけでなく、それ以外の成員にとっても彼ら相互間の、そして彼らと王との対面交流を伴う重要な営みであった。よって古典期マヤ都市の形成過程を解明する上で、社会における広場の役割はむしろ中核的な研究課題である。

発表者の問い

古典期マヤ都市における広場の政治性という研究課題に即して、発表者は二つの問いを立てた。

- 1) 広場の建設や増改築と社会変化は、どのような関係にあるのか。
- 2) 広場における儀礼は、王権やイデオロギーを表象しているのか。それとも異なった社会集団による権力やイデオロギーのせめぎあいであったのか。

調査目的と方法

これらの問いに即した本研究は、古典期マヤの都市遺跡であるエル・パルマールを調査対象とし、考古学調査に碑文解読を組み合わせることによって、広場の政治性を検討する。エル・パルマール遺跡は、メキシコ合衆国カンペチェ州南東部に位置する（図1）。調査に際して、最初の問いに対する答えを導くために、エル・パルマールだけではなく、古典期マヤ低地における歴史的背景を考慮する。

二つ目の問いに対しては、エル・パルマールの中心部に加えて都市周縁部の広場を精査することによって、都市全体における権力とイデオロギーについて考察する。特に本研究では、エル・パルマールの北周縁建造グループ（グスマン・グループ）に焦点を当てる。

アシュモア（1991）は、コパンやティカルを代表とする古典期（後250-900年）のマヤ諸都市にある北周縁グループが、都市中心部から見て「天空」や「祖先」という王権の支配的イデオロギーを強化する重要な空間であり、それによって中央集権体制を正統性していたと提唱している。本発表の後半では、この都市周縁部の空間形成と支配的イデオロギーについて考察する。

具体的には、まず踏査と測量調査により遺跡内における広場の位置と規模を特定する。次に、発掘調査による層位分析に、土器分析とベイズ統計を応用した放射性炭素年代を組み合わせることによって、広場の建設と増改築の編年を復元する。同時に、出土した遺構や遺物の分析と、石碑に刻まれた碑文の解読によって、広場における儀礼を明らかにする。これらのデータを、古典期マヤの歴史的背景に組み込むことによって、エル・パルマールの都市形成過程における広場の役割とその変遷を考察する。以下、調査によって得られた成果を、エル・パルマール中心部とグスマン・グループに分けて報告する。

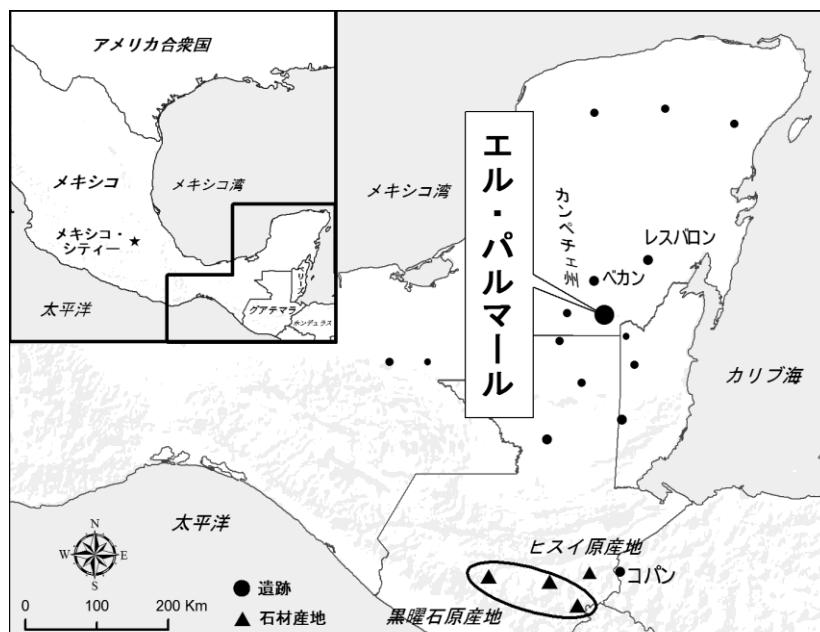


図1 エル・パルマール遺跡とマヤ地域の主要マヤ遺跡群

研究成果1：エル・パルマール中心部

1) 測量と発掘

2007~09年の踏査と3次元測量調査により、エル・パルマールは中心部と8つの周縁建造グループ群から構成され、総面積は10km²を超すことが判明した。中心部では高さ30mに達する2基のピラミッド神殿、約100基の神殿群、宮殿、球戯場、8つの広場を確認し、広場からはこれまで神聖文字の刻まれた51の石碑を発見している（図2）。2009年には中心部の8か所すべての広場を試

掘し、同時に石碑のマヤ文字を解読することで、考古学資料と碑文解読の双方から都市形成の過程における広場と儀礼の役割を考察した。以下、通時的にその過程を示す。

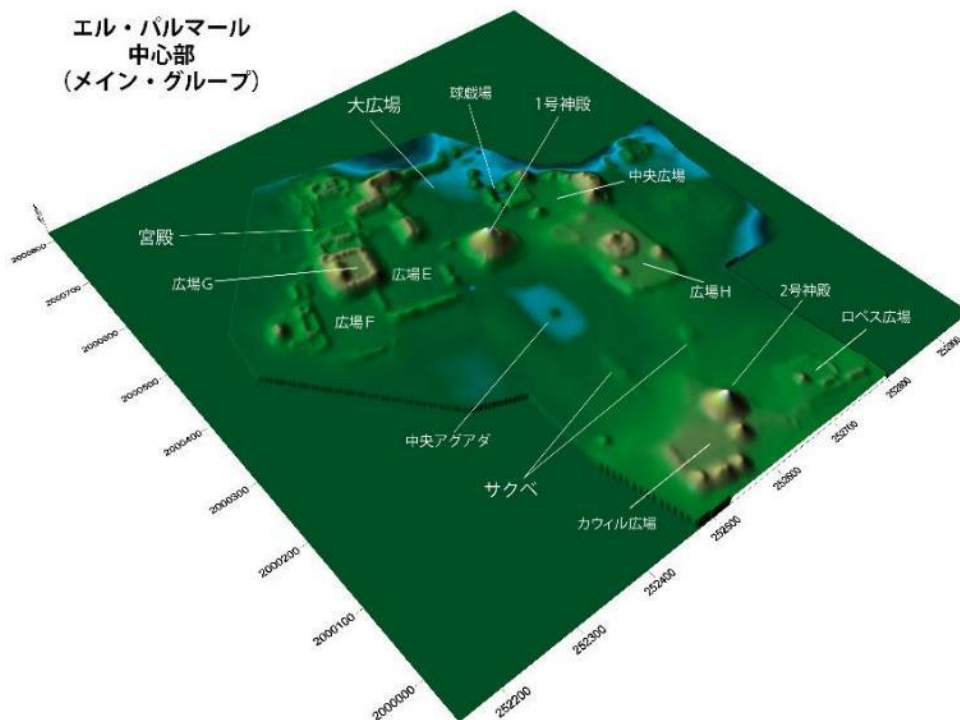


図2. エル・パルマル中心部の三次元測量図

層位分析に土器分析と放射性炭素年代測定を組み合わせると、まずエル・パルマルの中心部で前300–後250年頃、最大収容人数が約1万4千人の小規模な中央広場が建設されたことが分かった(表1)。土器分析から判断すると、広場の建設がはじまった時期はおそらく前150–前60年頃と考えられる。ほぼ同時期、盛り上がった地形の表面を人為的に加工した基壇上に、最大約5千人が収容できる広場Hも建てられた。

後400年頃になると、都市中心部が劇的に変化したことが分かる。この時期になると前時代の広場に加え、3万人超の人口を一度に収容できる大広場と2万人弱を収容できる広場Eが建設されたのである。エル・パルマルの人口は未だ不明だが、同規模のマヤ遺跡と比較すると、広場の総収容人数は都市人口の大部分に対応していた可能性が高い。同じ時期、宮殿に隣接する別の広場(広場G)が地上10メートルの石積みの基壇上に建設された。この広場の建築構造は人の出入りを制限し、周囲からの視界を遮断しているため、支配者専用の広場だったと考えられる。その後も後850–1000年頃に都市が放棄されるまで、定期的に広場の建設と改築がおこなわれた。後600年以降は、中心部のみならず北と西の周縁部にも広場が設けられた。

表1：エル・パルマールにおける広場の総面積と推定収容可能数の推移

	サイズ	推定収容可能数		
中心部の広場	面積 (m ²)	0.46m ² /人	1m ² /人	3.6m ² /人
大広場	14,135	30,728	14,135	3,926
中央広場	6,674	14,509	6,674	1,854
カウィール広場	3,161	6,872	3,161	878
広場 E	9,096	19,774	9,096	2,527
広場 F	6,134	13,335	6,134	1,704
広場 G	1,050	2,283	1,050	292
広場 H	2,455	5,337	2,455	682
ロベス広場	890	1,935	890	247
グスマン・グループ広場 A	968	2,104	968	269
	サイズ	時代ごとの総推定収容可能数		
時代	面積 (m ²)	0.46m ² /人	1m ² /人	3.6m ² /人
先古典期後期(前 300-後 250 年)	9,129	19,846	9,129	2,536
古典期前期 (後 250-400 年)	9,129	19,846	9,129	2,536
古典期中期 (後 400-600 年)	36,571	79,502	36,571	10,159
古典期後期 (後 600-800 年)	43,595	94,772	43,595	12,110
古典期終末期 (A.D. 800-1,000 年)	43,595	94,772	43,595	12,110

2) 遺物分析

偏光顕微鏡による土器に含まれた混和材の分析や、粒子励起X線分光法(PIXE)による黒曜石の原産地同定は、後 400 年－600 年以降に他の諸都市との交易が活発化したことを示唆している。土器の胎土分析では、後 400 年まで土器片が混和剤として使われていたのに対し、この時期以降は、大量の火山灰が使われるようになった。黒曜石は、後 400 年以降に建てられた広場の埋土や石碑の建立にともなう埋納から出土している。PIXE 分析の結果、そのすべてがグアテマラ高地から搬入されたことがわかった。

3) 碑文解読

広場に建立された石碑や出土した彩色土器の碑文を解読することにより、エル・パルマールに君臨した 10 人以上の諸王を特定した。石碑には、マヤ暦の 10 年または 20 年ごとのサイクル終了にあわせた諸王の儀礼が刻まれている。また守護神に囲まれた王や、カウィール神を象った笏を持つ王の姿も刻まれており、王権のイデオロギーが儀式と石碑建立の双方から敷衍されたと考えられる。大広場では後 600 年以降になると、王による放血儀礼が繰り返された。また広場 E にあるステラ 12 (後 639 - 692 年) には、カーン王朝のジュクノム・チェン二世王の名前が刻まれている。さらに

大広場や広場Eでは後820年までステラとアルタールが建て続けられた。これらの図像と碑文から、エル・パルマールは王権による政治体制が組織されており、記念建造物、石碑、彩色土器、定期的な儀式などによって王権を支えるイデオロギーが可視化されたと考えられる。

4) カーン王朝とティカル王朝の覇権争い（後378 - 600年）

エル・パルマール中心部の都市景観や遠距離交易が大きく変化した後400-600年頃は、マヤ低地中央部の諸都市においても変化が起こった。後378年以降になるとテオティワカン-ティカル勢力がエル・パルマール近郊の都市に政治的に介入する一方、カーン王朝（この頃の王都はジバンチエ）もエル・パルマール地域に勢力を伸ばしたことが、考古資料と碑文の双方からわかっている。

こうした社会状況下で、大広場と広場Gの建設は、エル・パルマールにおける権力関係の変化を可視化している可能性が高い。アクセスと可視性を極端に制限した広場Gの儀礼に参加できる人々は限られており、王権による政治体制によって社会的地位の格差が広がったことを示している。一方で、歴代の王は、都市の大観衆を前に自ら放血儀礼を繰り返し、記念碑を建て続けなければならなかった。これはエル・パルマール王朝が必ずしも強固な中央集権体制によって組織されていたのではないことを示唆している。すなわち、王権の威信や権威を普遍化するイデオロギーを他の成員が一方向的に受け入れたのではなく、そこには何らかの交渉が常にあったはずである。研究成果2では、このイデオロギーのせめぎあいについて、周縁部の広場の発掘成果を報告しつつ検討する。

研究成果2：エル・パルマール北周縁部、グスマン・グループ

1) マッピングと発掘

発表者は、中心部から1.3キロメートル北方に点在する建造物グループ、「グスマン・グループ」を調査した。北グループは、高さ約3メートルの建造物GZ1を含む7基の建造物から成り、それらの中央に小さな広場が建設されている。最大の特徴は、2009年の踏査によって発見された碑文を持つ階段にある。なぜならば、これまでマヤ地域で発見された碑文階段のほとんどが都市の中心部で発見されているからである。これまでの碑文階段はいずれも、王の血統や戦勝を記録することで王権を正統化する機能を果たしていた(Houston 1993; Stuart 2005 など)。それに対し、発表者の調査により発見されたグスマン・グループの碑文階段は都市周縁部に位置しており、考古資料と碑文解読という2つの異なる観点から、広場とイデオロギーに関する解釈に新たな可能性を開くものであった。

2010～11年、碑文神殿と広場を発掘し、建造物を修復した。土器分析と炭素年代から、グスマン・グループは、後600年以降に漆喰の床をともなった広場および周辺の建築群が整備され、後800-950年頃に放棄されたことがわかった。広場と建造物は増改築が重ねられたが、そのうち最初の更新と最後にグループを放棄する際に、終結儀礼がおこなわれた。発掘により碑文階段を有する建造物GZ1は、神殿であることが明らかとなった。

2) 碑文解読

階段に刻まれた碑文を解読することによって、グスマン・グループに関係する社会集団を特定した。解読した碑文は、後 726 年 9 月 13 日に碑文階段の除幕式が行われ、その儀式における中心人物はエル・パルマール王ではなく、アフパチ・ワール (Ajpach' Waal) という人物である。碑文によると、アフパチ・ワールは、ラカム(旗手)の称号をもつ役人の末裔であり、同年の約 3 か月前にコパン王を訪問した。すなわち、この碑文階段はエル・パルマールの王権の権威を高めるものではなく、コパンとの外交を記念して建てられたものである。特筆すべきは、碑文がエル・パルマール王を軽視した内容によって構成されていることである。

3) 建築と埋葬

建造物 GZ1 内部の発掘によって、前時代の階段に比べて碑文階段の幅が広く設計され、それによって劇場型の政治舞台に変化したことがわかった。広場の発掘はそれを裏付けている。広場は階段と同時期に整備され、より多くの観衆を収容できるようになったのである。碑文階段を増設した 6 度目の神殿更新時には埋葬も行われ、ラカム役人たちが碑文以外にもイデオロギーの敷衍に努めた様子を観察できる。

4) カーン王朝とティカル王朝の争い (後 695 年—736 年)

階段の碑文と図像からカーン王朝の政治戦略を推測できる。碑文後半にあたる階段の 5 段目には、カーン王朝のカウィール・トック王の名前が刻まれている。これは中心部のステラ 12 と組み合わせると、碑文階段が建てられた 8 世紀前半においても、エル・パルマールはカーン王朝の政治的介入を受け続けていたことを推測できる。なぜカーン王朝の王と紋章文字が刻まれたのか。なぜ、エル・パルマール王朝は 360km 近く離れたコパン王朝と同盟を結ばなければならなかったのか。発表者は、階段における紋章文字の空間分布を精査し、他の遺跡群から出土した碑文を比較分析することによって、これらの理由に仮説を立てた。

考察と結論

これまでの調査成果によって、エル・パルマールにおける広場の変化は、マヤ低地中央部の社会変化と関係していることが明らかとなった。また、マヤ都市周縁部の広場とそこで行われた儀礼は、つねに王権のイデオロギーを表象しているわけではなかった。碑文階段のある建造物 GZ1 が設けられたグスマン・グループの広場は、王権のイデオロギーを敷衍するためではなく、ラカム役人たちがエル・パルマール王と権力やイデオロギーをせめぎあう政治舞台であったと推測される。

発表者は、碑文階段に刻まれた文字システムという媒体によってのみラカム役人たちが支配者集団とイデオロギーをせめぎあったのではない点を強調したい。建造物 GZ1 の面した広場において、

王などの参加者に儀礼を体験させることによって、王朝内に彼らの社会的現実や価値を浸透させようと試みたのである。そのためには碑文だけではなく、広場という祭祀空間や階段などの政治舞台が必要であり、その空間変化は発掘という考古学的手法によってはじめて明らかにされた。そして、彼らのイデオロギーのせめぎあい、中央部において諸王が繰り返した放血儀礼という行為にも反映していると発表者は考える。

広場の建設や儀礼行為は、単純な支配的イデオロギーの表象ではなく、社会におけるさまざまなイデオロギーと結びついている。関（2006：35）が指摘するように、人類史を研究する上で認識しなければいけないことは、錯綜した社会状況において異なった成員たちが常に同じイデオロギーで染まっているような均質的社会はありえないということである。すなわち特定の時代における社会は、マルクスやエンゲルス、またはアッシュモア（1990）が提唱したような単一のイデオロギーによって支配されているのではなく、いくつものイデオロギーのせめぎあいによって編み上げられている。言い換えると、支配的イデオロギーという考え方では、都市中心部やその周縁における人々の活動を均質にとらえるので、人々の行為が社会システムや都市形成に与えた政治的ダイナミズムを覆い隠してしまう。

むしろ、社会を研究する上でアントニオ・グラムシが提起したように、被支配者を自発的に服従させるイデオロギーの内面化を明らかにすることは重要である（Gramsci 2005[1971]）。しかしイデオロギーは、支配よりも異なった集団間の権力のせめぎあいと結びつけて考察することで、複雑な社会関係や権力の網の目を浮き上がらせ、より詳細な社会の変遷をとらえることが可能になろう。その際、社会構成員のさまざまなイデオロギーの存在を認識し、それらのイデオロギーと人々の行為が、モノを媒介として互いに切り離すことのできずに相互に影響しあう関係であることを認識しなければならない。それによってはじめて社会におけるイデオロギーのせめぎあいを浮かび上がらせることが考古学研究において可能となると発表者は考える。

古典期マヤ都市の広場は、王権を正統化するために建設、利用されただけではない。王族とは異なる役人たちや一般成員が広場の建設や儀礼に主体的に関わることで、社会地位の再分配を試みる、せめぎあいの場としても機能していたのである。さらに政治舞台としての広場で繰り返された儀礼による権力の交渉は、それに参加するひとびとの価値観、社会的現実、行動を規定するにおよんだであろう。

引用文献

Althusser, Louis 2001[1971] *Lenin and Philosophy, and Other Essays*. New Left Books, London.

Becker, Marshall J. 1991 Plaza Plans at Tikal, Guatemala, and at Other Lowland Maya Sites: Evidence for Patterns of Cultural Change. *Cuadernos de Arquitectura Mesoamericana* 14: 11-26.

Clark, John 2004 Mesoamerica Goes Public: Early Ceremonial Centers, Leaders, and Communities. In *Mesoamerican Archaeology*, edited by Julia A. Hendon and Rosemary A. Joyce, pp. 43-72. Blackwell Publishing Ltd., Malden.

Gramsci, Antonio 2005 [1971] *Selection from the Prison Notebooks*. Translated by Q. Hoare and G. N. Smith. International Publishers, New York.

Houston, Stephen D. 1993 *Hieroglyphs and History at Dos Pilas: Dynastic Politics of the Classic Maya*. University of Texas Press, Austin.

Inomata, Takeshi 2006 Plazas, Performers, and Spectators: Political Theaters of the Classic Maya. *Current Anthropology* 47(5):805-841.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo and Hitoshi Yonenobu 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340:467-470.

関雄二 2006 『古代アンデス 権力の考古学』 諸文明の起源 12 学術選書 006 京都大学学術出版会

Stuart, David 2005 A Foreign Past: The Writing and Representation of History on a Royal Ancestral Shrine at Copan. In *Copán: The History of an Ancient Maya Kingdom*, edited by Willys Andrews and William L. Fash, pp. 373-394. School of American Research Press, Santa Fe, New Mexico.

Tsukamoto, Kenichiro 2014 Multiple Identities on the Plazas: The Classic Maya Center of El Palmar, Mexico. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by K. Tsukamoto and T. Inomata, pp. 50-67. The University of Arizona Press, Tucson.

「祭祀建築の儀礼的放棄:ペルー中央高地南部ワンカ・ハサ遺跡の事例」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD, 山形大学）

1. はじめに

アンデス文明史上初の広域国家であるワリ国家は、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷のワリ遺跡を首都とし、7世紀から10世紀にかけて繁栄したと考えられている（図1, ¡Error! La autoreferencia al marcador no es válida.）。しかし、その形成過程に関してはほとんど明らかになっていない。ワンカ・ハサ遺跡は、アヤクーチョ谷に位置し、ワリ国家の形成期と重なる6-7世紀頃に利用されていたと考えられる。ワリ国家の形成、繁栄、衰退について、「行政センター」に代表されるような大遺跡ではなく、小規模な集落遺跡の視点からとらえることを目的とし、2002年と2003年にアヤクーチョ谷のトリゴパンパ村周辺に存在する3遺跡において発掘調査を実施した。そのうちの一つがワンカ・ハサ遺跡である。この調査の過程で、新たな建物を建てるために古い建物が儀礼的に放棄されたことを示す状況が明らかとなった。本発表では、この調査の背景、調査内容、そして調査後の土器の分析から判明したことについて報告する。

2. 研究の背景

ワンカ・ハサ遺跡での発掘調査により、建物が儀礼的に放棄されている状況が明らかになった。また、その儀礼的放棄と関連する遺物も、放棄儀礼の内容や放棄された建物の機能を推測するうえで手がかりとなるものであった。しかしながら、当初の研究の目的は別のところにあった。そこで、祭祀や儀礼の研究と直接関係するわけではないが、ここでワンカ・ハサ遺跡での調査を実施した経緯について簡単に説明しておく。

2.1. 先行研究

ワリ国家の存在が学界において認識されるようになったのは、1960年代以降のことである。現在ワリ国家と関連づけられている土器の図像には、ティティカカ湖南東岸のティワナク遺跡の石彫に見られる図像との類似性が認められた(Uhle 1991[1903]:25)。そのため、ペルー海岸部に由来するティワナク的土器はティワナク文化と関連づけられ、それらはティアワナコ様式、ティアワナコイデ、海岸ティアワナコなどと呼ばれた(Kroeber 1930; Bennett 1946; Stumer 1956)。しかし、Uhle自身はワリ文化の土器とティワナク遺跡の芸術様式の違いに気付いており、ペルー海岸部のティワナク的土器、すなわち今日のワリ文

化の土器の起源はティワナク遺跡とは別の場所であると予想していた(Uhle 1991[1903]:25)。

今日のワリ文化の土器の起源地として、アヤクーチョ谷のワリ遺跡にいち早く注目したのはペルー人考古学者であった(Tello 1931; Larco Hoyle 1948)。彼らの考えはすぐには学界の主流にはならなかったが、1940年代後半以降、アメリカ人研究者もワリ文化とティワナク文化が別物であると次第に認識するようになり、一般に両者は区別されるようになった。

このように、編年のための土器研究によってワリ文化の存在が明らかになってくる中で、ワリ文化の母胎となる社会に関する考察も現れてきた。1964年に Dorothy Menzel によって征服国家としてのワリ帝国という概念が提示されると(Menzel 1964)、ワリ帝国の存在を検証し証明するための研究が行われるようになった。とくに、全体として矩形の平面プランを有し、内部が直交する壁によって碁盤の目上に仕切られた建築が、ワリ国家の地方支配における拠点、すなわち「行政センター」として注目され、「行政センター」に関する調査が盛んに行われるようになった(Anders 1986; Isbell et al. 1991; Schreiber 1978, 1992; McEwan 1984, 2005; Topic 1991)。

このような調査によってワリ国家の政治・社会構造が次第に明らかになり、帝国論に代わる社会モデルも提示されるようになった(Jennings [ed.] 2010)。しかし、これまでのワリ国家研究には大きく2つの問題が存在した。1つは、ワリ国家の起源に関する研究の不足である。アヤクーチョ谷で成立したワリ国家であるが、これまでのアヤクーチョ谷でのワリ国家に関する調査は、ワリ国家の繁栄期に焦点が当てられ、ワリ国家の成立過程や衰退過程に対する関心は希薄であった。もう1つの問題は、調査対象とされてきた遺跡がいずれも大規模な遺跡に限られるということである。しかし、いわゆる社会的弱者や被支配者にも権力を認める近年の権力論や(Benton 1981; Giddens 1979; Miller and Tilley 1984)、利害を異にする集団(あるいは個人)間の交渉(Brumfiel 1994; Yoffee 2005)や社会階層の多次元性(Crumley 1995)に注目する社会構造論に照らすならば、ワリ国家の理解にとって小規模な集落遺跡の調査は欠かせない。これらの問題を克服するためには、アヤクーチョ谷で、利用時期がワリ国家の成立前から衰退後までにわたると考えられる小規模な遺跡において、発掘調査を行う必要がある。このような問題意識のもと調査対象として選択したのが、トリゴパンパ村の周囲に存在した3遺跡であり、その中の1つがワンカ・ハサ遺跡であった(土井 2012)。

3. 調査の概要

調査地と発掘調査の概要は以下の通りである。

3.1. 調査地

ワンカ・ハサ遺跡は、現在のトリゴパンパ村の周囲に位置する遺跡のうちの1つである。トリゴパンパ村は、行政上、アヤクーチョ州、ワマンガ郡、ティクリャス行政区に属しており、村中心部の標高は2,520mである。アヤクーチョ州の州都であるアヤクーチョ市からの距離は、地図上の直線距離で約9kmである。また、ワリの首都であるワリ遺跡からは、地図上の直線距離で10kmほどである(図2)。

2001年に筆者が行った遺跡踏査により、この村の周辺で、先スペイン期の遺構と思われる構造物が観察できる遺跡を3つ登録した。それらは地元住民の呼称に基づき、ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、クルス・パタ遺跡と命名した。それらの中でワンカ・ハサ遺跡は、チリコ川に面した自然の丘上に存在する遺跡であり、標高約2560mの地点に立地している。

3.2. 発掘調査

2002年の8月から10月中旬にかけて、ワンカ・ハサ遺跡で発掘調査を行った。ワンカ・ハサ遺跡では、丘の頂上部付近の平坦部(以下平坦部)とその下方の斜面部(以下斜面部)において、地表から石壁と思われる石列を確認することができた。そこで、それらの地点で発掘調査を実施した。発掘面積は175m²である。

平坦部では、石壁の切り合いの様子と層位学的関係から、3つの建築フェイズを確認し、それぞれ古い順に第1、第2、第3建築フェイズと名付けた。建築フェイズとは、大規模な建て替えや改築にもとづき設定した時期区分であり、ワンカ・ハサ遺跡の平坦部における主な建設活動が3回あったことを意味している。一方斜面部では、石壁の切り合い関係から、2つの建築フェイズの存在を確認した。

この発掘調査により、第2建築フェイズのD字形建築(R-8)とこの建物に隣接する矩形建築(R-2)を破壊し埋め立て(図3)、その上に第3建築フェイズの建物を建設していることが明らかになった。これらの建築内外の床面上では、珍しい装飾や器形のを多く含む土器や土製品が検出された(土井2010)。また、これらの建築の埋土中からも珍しい器形や装飾を有する土器が出土した。

第2建築フェイズの床面上で検出された土器は、ワルパ様式とクルス・パタ様式に属する。ワルパ様式は、単純な幾何学文を特徴し、装飾に使用される色も黒、白、赤の3色に限られる。アヤクーチョ谷の前期中間期の土器を代表するものである。クルス・パタ様式も、装飾の中心は幾何学文であるが、ワルパ様式よりも複雑な文様が多彩色で表現されることが特徴である。また、その図像にはナスカ文化の土器との共通性が認められる。

R-2とR-8に対応する床面上からは、珍しい装飾や器形を有する土器と土製品が出土した。それらの中には、胴部がくびれた杯、鹿を模した器、3つの建物を表現した土器(図4)、そして筒状の土製品が含まれる。とくにR-8の内部では、土器が集中して検出された。また、同一器種のものが複数存在した場合、それらは、器種毎にまとまって検出された。

4. 解釈

発掘調査により、新たな建物の建設のために、建築 R-2 と R-8 が破壊され、埋められた状況が明らかになった。R-2 と R-8 内外の床面上から検出された土器も、この埋め立ての際に置かれた、もしくは投げられたものであると考えられる。それらの土器の出土状況は、R-2 と R-8 の放棄が儀礼的に行われたことを示唆している。また、出土した土器に表現された図像は、放棄された建物の機能を推測する手がかりとなるものであった。

4.1. 建築放棄儀礼

R-8 内の床面上で検出された土器は、すでに述べたように器種毎にまとまって状態で見つかった。この状況は、それらが単にうち捨てられたものではなく、意図的に置かれた、もしくはその場で破壊されたことを示している。器種毎の出土地点の違いや、ほぼ完形で出土したものがある一方で、粉々に粉砕された状態でみつかったものもあるという出土状況の違いは、放棄時に行われた儀礼内容と関連している可能性もある。

復元した土器を詳細に観察したところ、繰り返しの使用による摩耗や損傷の痕跡は認められなかった。したがってそれらの土器は、日常的に、あるいは頻繁に使用されていたものとは考えにくい。さらに、それらの土器には装飾や器形において、他の発掘区や遺跡に類例の見られない珍しいものが含まれていた。そのような特徴は、それらの儀礼具や奉納品としての価値を示唆している。また、全ての長頸壺は頸部が欠損した状況で見つかった。これも意図的な行為であると考えられ、儀礼的廃棄(Walker 1995:76-77)として理解できる。

これらの建物は、その上に建造された建物の床面レベルまで、壁石と考えられる石を大量に含む様な土砂により埋められていた。さらに、床面上から検出された大型土器の頂点の高さは、ほぼこの埋土の高さと一致する。この状況は、床面上に土器を置く行為、建築を破壊し埋めるという行為、そしてその上に新たな建物を建設するという行為が一連のものであったことを示している。

これらの状況を総合して考えると、R-2 と R-8 の床面と関連して検出された土器は、これらの建築を放棄するさいに、それぞれの空間へと奉納することを目的として用意されたものであると考えられる。これらの器の中身であると考えられる有機物は検出できなかったが、逆さに置かれた状態で見つかった器も多く、これらの器の内容物が床、すなわちこの空間に対し捧げられた可能性もある。このように、特別な器を建物の放棄時に奉納するという行為は建築の放棄儀礼に関わる行為として理解できる。また、検出された土器の器種全体を眺めると、大量の飲食物を保管・運搬するための大型壺と大型鉢、飲食物を取り分けるための大型匙、液体を給仕するための注口付土器、そして飲食するための多数の鉢、杯、コップ形土器から構成されていた。すでに述べたように、それらの容器から飲食物に関する直接的な証拠は得られていないが、単なる奉納品ではなく、放棄に先立つ饗宴で使

用された器である可能性もある。長頸壺の頸部を取り除くという行為も、儀礼に用いることによって危険性を帯びた道具に対する処置であると考えることが可能である(Walker 1995)。

4.2. D字形建築の機能

このように儀礼的に放棄された建物は、どのような機能を有していたのであろうか。残念ながら、この空間が本来どのような機能を有していたのかを示す直接的な証拠は得られていない。しかし、同じ形態を有する建物との比較、および R-8 から出土した土器の図像的分析により、その機能を推測することが可能である。

4.2.1. ワリ国家の D 字形建築

最近のワリ国家に関する研究により、ワリ国家と D 字形建築との関連性が明らかになり、今日では、D 字形建築の存在によりワリ国家関連遺跡であることが認識されるようになっている。

これまでに D 字形建築の存在が報告されている遺跡はそれほど多くはないが、地理的には、ワリ国家に関連する土器や建築が分布する地理的範囲内において、北から南まで広く分布している。とくに、ワリ国家の中心地であるアヤクーチョ谷からの報告が多い(図 1, 図 2)。

アヤクーチョ谷では、ワリ遺跡のチェホ・ワシ区域(Benavides 1991)とヴェガチャヨック・モホ区域(Bragayraq 1991; Gonzalez 1996)、コンチョパタ遺跡(Isbell and Cook 2002: 291-292; Pozzi-Escot 1991: 84; Ochatoma y Cabrera 2000: 464)、ニャウインプキオ遺跡(Machaca 1997)で D 字形建築の存在が確認されている(図 2)。また、アヤクーチョ谷の外では、アヤクーチョの北方のオンコ・パンパ遺跡(Isbell 1989; 1991a)、南方のヤコ遺跡(Meddens y Cook 2001)、セロ・バウル遺跡(Nash and Williams 2005; Williams 2001; Williams y Isla 2002; Williams et al. 2002)、そしてレクレス・パタ遺跡(Schreiber 2005:143)から D 字形建築の存在が報告されている(図 1)。

上述した D 字形建築と関連する考古学的特徴は遺跡によって異なるが、埋葬、埋納、人や動物の供犠、トウモロコシ(*Zea mays*)あるいはコショウボク(*Schinus molle*)から造られた酒の消費、そして火の使用という行為と関連していた。また、D 字形建築の中央付近からは、調査者が日時計と解釈する石柱も出土している(Ochatoma y Cabrera 2000, 2012)。これらは全て祭祀活動と関連づけることができ、現在では D 字形建築はワリ国家の祭祀建築として認識されている(Cook 2015)。ワンカ・ハサ遺跡の D 字形建築の放棄状況は、この建物に対する人々の特別な配慮を示しており、この建物を他の遺跡の D 字形建築と同様の祭祀建築と考えることに問題はない。

4.2.2. 図像が示す D 字形建築の機能

このように、R-8 は祭祀と関連する建物であったと考えられるが、R-8 内部から出土した建築土器の図像的検討により、この建物が豊穡儀礼と関係していた可能性が明らかになった。ペルー南海岸ナスカ地域のパチェーコ遺跡(図 1)から出土した埋納土器には、植物図像に混じり建物の図像が描かれている(図 5)。この図像はこれまでワリ国家の矩形建築を表現したものであると解釈されてきたが(Isbell 1977; McEwan 1998)、むしろ R-8 から出土した土器に表現された塔状の建物との類似性が際立っている。

パチェーコ遺跡から出土した土器には、多様な食用植物が描かれており、この土器の図像が農作物の豊穡の概念と関連していることは明らかである(図 5)。この土器は埋納土器として知られ、奉納品として意図的に割られて埋められた状態でみつかったものである。このような図像が描かれた土器を利用した儀礼にも、農作物の豊穡を祝う、あるいは祈願する側面があったことが推測される。したがって、これら農作物と同一画面に描かれた建物と類似した図像がワンカ・ハサ遺跡の R-8 から出土していることは、この建物も豊穡の概念と関わるものであったこと示唆している。

このワンカ・ハサ遺跡の建築土器に表現されている建物が、現実世界を反映しているという保証はない。しかし、そこには、独立して存在する円形および矩形の平面プランを有する建物が表現されていることは興味深い。矩形の建物は R-2 に、円形の建物は、この建築土器が出土した R-8 の平面プランにほぼ一致するからである。この D 字形建築と矩形建築と言う組み合わせは、儀礼具と関連して中期ホライズンのワリ国家関連遺跡から報告されているので(Cook 2015:318)、前期中間期のアヤクーチョ谷においても祭祀建築の一般的な組み合わせであったのかもしれない。建築土器が現実存在する建物を表現したものであると仮定するならば、R-8 はパチェーコ遺跡の土器に表現された建物と結び付く。したがって、R-8 では豊穡に関わる儀礼が行われていた可能性が浮かび上がる。問題となるのは、R-8 からはパチェーコ遺跡のような農作物に関する図像や遺物は出土していないことである。ワルパ様式やクルス・パタ様式の図像は抽象的なものが多いため、農作物もかなり抽象的なかたちで表現されていたため、農作物の図像として認識できていないのかも知れない。もう一つの可能性としては、当時のワンカ・ハサ遺跡の住民は農作物よりも家畜に関心があった可能性がある。その傍証としては、R-8 の埋土から出土したラクダ科動物の頭部を模した土器が存在する(図 6)。

5. まとめと今後の課題

ワンカ・ハサ遺跡の事例は、第 2 建築フェイズに属する D 字形建築と矩形建築の放棄が儀礼的に行われたことを示していた。また、ワンカ・ハサ遺跡の D 字形建築は、祭祀建築としての機能を有していた可能性が高い。この D 字形建築は、中期ホライズンに栄えたワリ国家の祭祀建築として知られているが、ワンカ・ハサ遺跡のように前期中間期に位置づ

けられる例についての報告はない。したがって、ワンカ・ハサ遺跡のD字建築は、今のところワリ国家のD字建築に先立つ最古の例であり、その出現や変遷を知るための貴重な資料となる。ただし、ワリ国家の形成とD字形建築との関係解明のためには、そこで誰が、何を行っていたのかを明らかにし、そのような行為や活動が地位の差異化や社会変動とどのように関わっていたのかを解明する必要がある。通常、考古学的に明らかにすることができるのは、D字形建築が廃棄されたときの状況であるため、その本来の機能を知ることが決して容易ではない。

また、R-2やR-8の放棄がどのように行われたのかという点に関しても、依然として解明すべき問題が残されている。具体的には、これらの建築に伴い検出された土器が、最初から奉納品として納めることを目的としたものであったのか、それとも放棄に関わる儀礼で使用され、その後奉納品として廃棄されたのかを解明する必要がある。なぜならば、ワリ国家関連遺跡においては、土器が意図的に割られて埋められた状況が検出されることが多いが、それらは奉納品としてのみ扱われることが多く、儀礼における饗宴との関係が問題にされることがあまりないからである。そのためには、R-2やR-8から出土した土器の付着物の分析や、R-8の未発掘部分の発掘により、饗宴との関連を示す食物残滓の有無を確認する必要がある。

R-2とR-8を放棄するさいに、念入りな儀礼がおこなわれた可能性が高いことは、「神殿埋葬」(Izumi and Terada 1972; 大貫 2010: 79)の概念を想起させる。この概念は、アンデス形成期(紀元前3000-紀元前50)の神殿が放棄される際に、儀礼的手続きを踏んで埋められることを指していた。現在の形成期研究においては、「神殿埋葬」の現象は、比較的短期間に繰り返されていることと社会変化との関わりから「神殿更新」としてとらえられるようになった。しかし、ワンカ・ハサ遺跡の事例は建物の更新ではなく、あくまでも建物の機能停止と放棄をとまなう「埋葬」として理解できる。建物の「埋葬」という言い方は建物を擬人化した表現であるが、D字形建築が当時の人々にどのように認識されていたのかという問題も、今後探求してみたい課題である。この意味において、パチューコ遺跡から出土した土器に表現されている建物が、枝からぶら下がる木の実のように表現されていることは、この建物が現在の我々の認識とは全く異なる仕方で当時の人々に認識されていた可能性を示している。

引用文献

Anders, M. B.,

1986. *Dual Organization and Calendars Inferred from the Planned Site of Azangaro-Wari Administrative Strategies*, Unpublished Ph.D. Dissertation: Cornell University.

Benavides C., M.,

1991. Cheqo Wasi, Huari. In: W. H. Isbell & G. F. McEwan, eds. *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research and Library Collection, pp. 55-69.

Bennett, W. C.,

1946. The Archaeology of the Central Andes. In: J. H. Steward, ed. *Handbook of South American Indians. Vol.2: The Andean Civilizations*. Washington, D. C.: Bulletin 143. Smithsonian Institution, pp. 61-147.

Benton, T.,

1981. 'Objective' Interests and the Sociology of Power.. *Sociology*, 15(2), pp. 161-184.

Bragayrac D., E.,

1991. Archaeological Excavations in the Vegachayoq Moqo Sector of Huari. In: W. H. Isbell & G. F. McEwan, eds. *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D. C.: Dumbarton Oaks Research and Library Collection, pp. 71-80.

Brumfiel, E. M.,

1994. Factional Competition and Political Development in the New World: An Introduction. In: E. M. Brumfiel & J. W. Fox, eds. *Factional Competition and Political Development in the New World*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 3-13.

Cook, A. G.,

2015. The Shape of Things to Come: The Genesis of Wari Wak'as. In: T. L. Bray, ed. *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*. Boulder: University Press of Colorado, pp. 295-334.

Crumley, C. L.,

1995. Heterarchy and the Analysis of Complex Societies. In: R. M. Ehrenreich, C. L. Crumley & J. E. Levy, eds. *Heterarchy and the Analysis of Complex Societies*: Archaeological Papers of the American Anthropological Association Number 6, pp. 1-5.

- Doi, M.(土井, 正樹),
2010. 「ワリの祭祀建築の起源を求めて－ペルー、アヤクーチョ谷、ワンカ・ハサ遺跡のD字形建築－」 『古代アメリカ』 pp. 103-114.
- Doi, M.(土井, 正樹),
2012. 『小集落から見た初期国家の形成過程－先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として－』 総合研究大学院大学, 文化科学研究科, 比較文化学専攻, 博士学位論文.
- Giddens, A.,
1979. *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*. Berkeley: University of California Press.
- Isbell, W. H.,
1989. Honcopampa: Was it a Huari Administrative Center?. In: R. M. Czwarno & F. M. Meddens, eds. *The Nature of Wari: A Reappraisal of the Middle Horizon Period in Peru*. Oxford: BAR International Series 525, pp. 98-114.
- Isbell, W. H.,
1991. Honcopampa: Monumental Ruines in Peru's North Highlands. *Expedition*, 33[3], pp. 27-36.
- Isbell, W. H., Brewster-Wray, C. & Spickard, L. E.,
1991. Architecture and Spatial Organization at Huari. In: W. H. Isbell & G. F. McEwan, eds. *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research and Library Collection, pp. 19-53.
- Isbell, W. H. & Cook, A. G.,
2002. A New Perspective on Conchopata and the Andean Middle Horizon. In: H. Silverman & W. H. Isbell, eds. *Andean Archaeology III: Art, Landscape, and Society*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp. 249-305.
- Izumi, S. & Terada, K.,
1972. *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: The University of Tokyo Press.
- Jennings, J.,
2010. Beyond Wari Walls. In: J. Jennings, ed. *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*. Albuquerque: University of New Mexico Press, pp. 1-18.

Knobloch, P.,(online)

2013. An Early Intermediate Period Deposit of Huarpa Style Ceramics from the site of Huari, Department of Ayacucho, Perú. *ArkeoAyacucho Perú*.(2015.1.19)

Kroeber, A. L.,

1930. Archaeological Explorations in Peru, Part II, the Northern Coast. *Memoirs*, 2(2).

Larco Hoyle, R.,

1948. *Cronología Arqueológica del Norte del Perú*. Buenos Aires: Sociedad Geográfica Americana.

Machaca, G.,

1997. *Secuencia cultural y nuevas evidencias de formación urbana en Ñawinpuquio*, Ayacucho: Tesis de Licenciatura, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad San Cristóbal de Huamanga.

McEwan, G. F.,

1984. *The Middle Horizon in the Valley of Cuzco, Peru: The Impact of the Wari Occupation of Pikillacta in the Lucre Basin* : Unpublished Ph.D. dissertation, The University of Texas at Austin.

McEwan, G. F. ed.,

2005. *Pikillacta: The Wari Empire in Cuzco*. Iowa City: University of Iowa Press.

Meddens, F. & Cook, A. G.,

2001. La administración Wari y el culto a los muertos: Yako, los edificios en forma "D" en la sierra sur-central del Perú. En: L. Millones, ed. *Wari: Arte Precolombiano Peruano*. Sevilla: Fundación El Monte, pp. 212-228.

Menzel, D.,

1964. Style and Time in the Middle Horizon. *Ñawpa Pacha*, Volume 2, pp. 1-106.

Miller, D. & Tilley, C.,

1984. Ideology, Power and Prehistory: An Introduction. In: *Ideology, Power and Prehistory*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-15.

Nash, D. J. & Williams, P. R.,

2005. Architecture and Power on the Wari-Tiwanaku Frontier. In: K. J. Vaughn, D. Ogburn & C. A. Conlee, eds. *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*. Arlington: American Anthropological Association, pp. 151-174.

Ochatoma, J. & Cabrera, M.,

2000. Arquitectura y áreas de actividad en Conchopata. *Boletín de Arqueología PUCP*, Volumen 4, pp. 449-488.

Ochatoma, J. & Cabrera, M.,

2012. Wari: Una joya en bruto. Excavaciones arqueológicas revelan nuevos secretos del primer imperio andino. *Revista El Tejuelo*, 2(4), pp. 24-26.

Onuki, Y.(大貫, 良夫),

2010.「第一章 アンデス文明形成期研究の 50 年」大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』東京:朝日新聞出版, pp. 55-103.

Pozzi-Escot B., D.,

1991. Conchopata: A Community of Potters. In: W. H. Isbell & G. F. McEwan, eds. *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D. C.: Dumbarton Oaks Research and Library Collection, pp. 81-92.

Schreiber, K.,

2005. Sacred Landscapes and Imperial Ideologies: The Wari Empire in Sondondo, Peru. In: *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*. Arlington: American Anthropological Association, pp. 131-150.

Schreiber, K. J.,

1978. *Planned Architecture of Middle Horizon Peru: Implications for Social and Political Organization*: Unpubsished Ph. D. dissertation, State University of New York at Binghamton.

Schreiber, K. J.,

1992. *Wari Imperialism in Middle Horizon Peru*. Ann Arbor: Museum of Anthropology, University of Michigan.

Stumer, L. M.,

1956. Development of Peruvian Coastal Tiahuanacoid Styles. *American Antiquity*, 22(1), pp. 59-69.

Tello, J. C.,

1970[1931]. Las ruinas de Huari.. En: R. Ravines, ed. *Cien años de arqueología en el Perú: Fuentes e investigaciones para la historia del Perú*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos, pp. 519-523.

Topic, J. R.,

1991. Huari and Huamachuco. In: *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D. C.: Dumbarton Oaks Research and Library Collection, pp. 141-164.

Uhle, M.,

1991[1903]. *Pachacamac: A Reprint of the 1903 Edition by Max Uhle*. Philadelphia: The University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania.

Unkel, I. & Kromer, B.,

2009. The Clock in the Corn Cob: On the Development of a Chronology of the Paracas and Nasca Period Based on Radiocarbon Dating. In: M. Reindel & G. A. Wagner, eds. *New Technologies for Archaeology: Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca, Peru*. Heidelberg: Springer, pp. 231-244.

Waker, W. H.,

1995. "Ceremonial Trash?" In J. M. Skibo, W. H. Walker, & A. E. Nielsen, eds. *Expanding Archaeology*. Salt Lake City: University of Utah Press, pp. 67-79.

Williams, P. R.,

2001. Cerro Baúl: A Wari Center on the Tiwanaku Frontier. *Latin American Antiquity*, 12(1), pp. 67-83.

Williams, P. R. & Isla C., J.,

2002. Investigaciones arqueológicas en Cerro Baúl, un enclave Wari en el valle de Moquegua. *Gaceta Arqueológica Andina*, Volumen 26, pp. 87-120.

Williams, P. R., Isla, J. A. & Nash, D. J.,

2002. Cerro Baúl: un enclave Wari en interacción con Tiwanaku. *Boletín de Arqueología PUCP*, Volumen 5, pp. 69-87.

Yoffee, N.,

2005. *Myths of the Archaic State*. Cambridge: Cambridge University Press.

図表

表 1 本発表に関連する土器編年と社会・文化
(Menzel 1964; Knobloch 2012; Unkel and Kromer 2009 を参照)

(年)	時期名	南海岸(パルパ)	アヤクーチョ谷	社会・文化名
1500	後期中間期	イカ	アヤ・オルホ ハチスホ タンタ・オルホ アルハヤ	チャンカ
1000	中期ホライズン	ナスカ9(チャキパンパ) ナスカ8(ロロ)	ワマンガ ビニャーケ コンチョパタ、ロブレス・モホ チャキパンパ オクロス	ワリ
600	前期中間期	後期	↑ ワルパ クルス・パタ	ワルパ
440		中期		
325		前期		
90	移行期	ナスカ1 オクカへ10		
紀元後 0 紀元前 120				

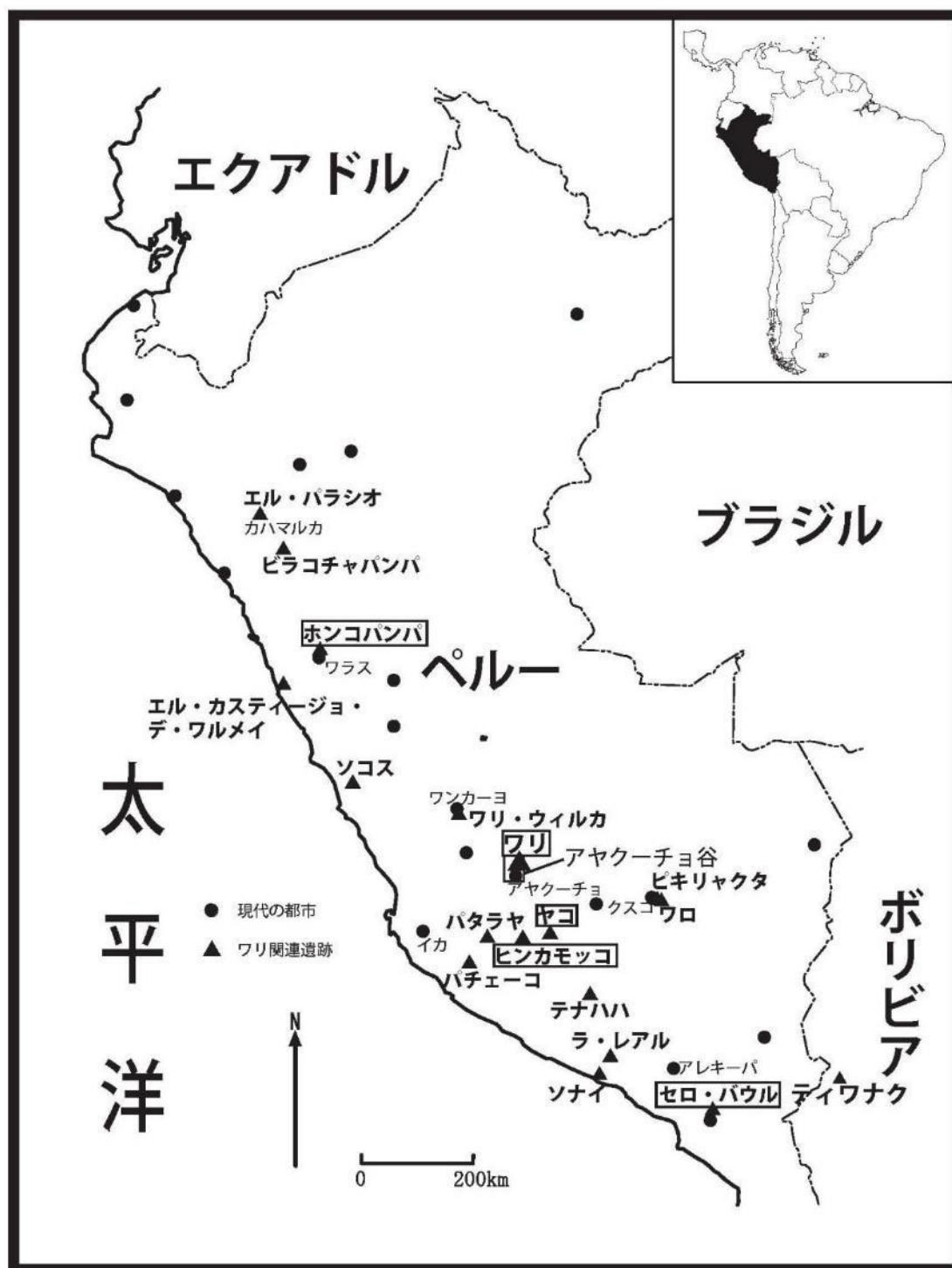


図1 アヤクーチョ谷の位置とワリ関連遺跡
(四角の囲みはD字形建築が存在する遺跡を示す)

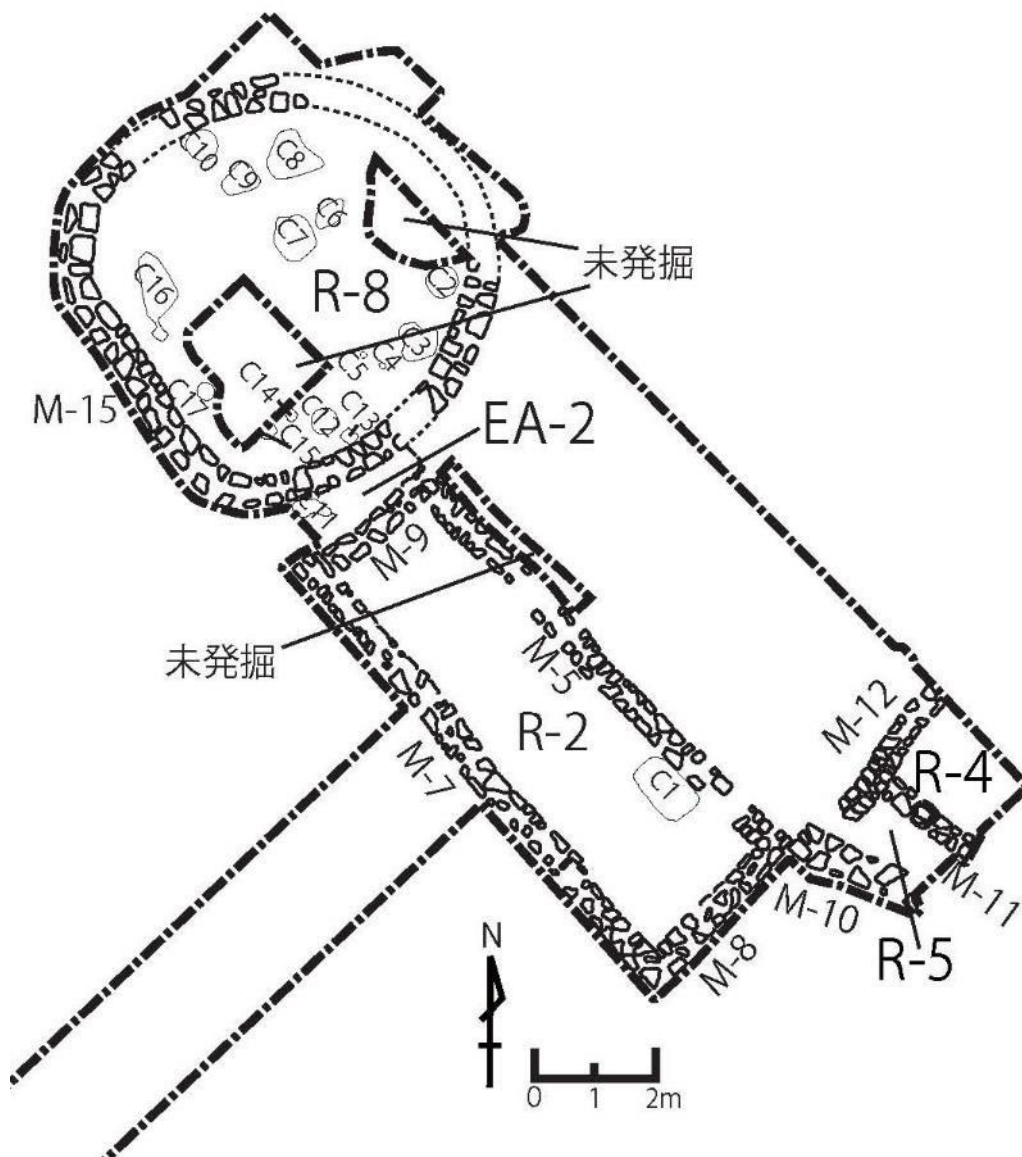


図3 ワンカ・ハサ遺跡平坦部、第2建築フェイズの遺構



図4 建築土器

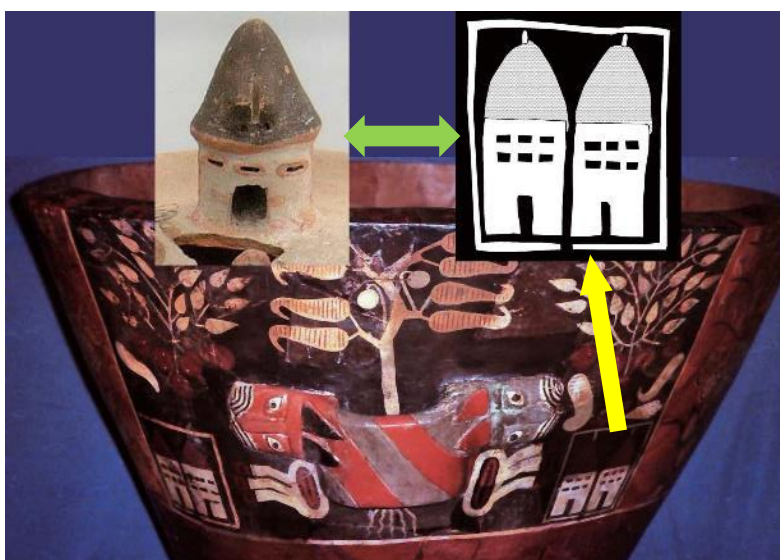


図5 パチェーコ遺跡の埋納土器に表現された建築と建築土器の建物

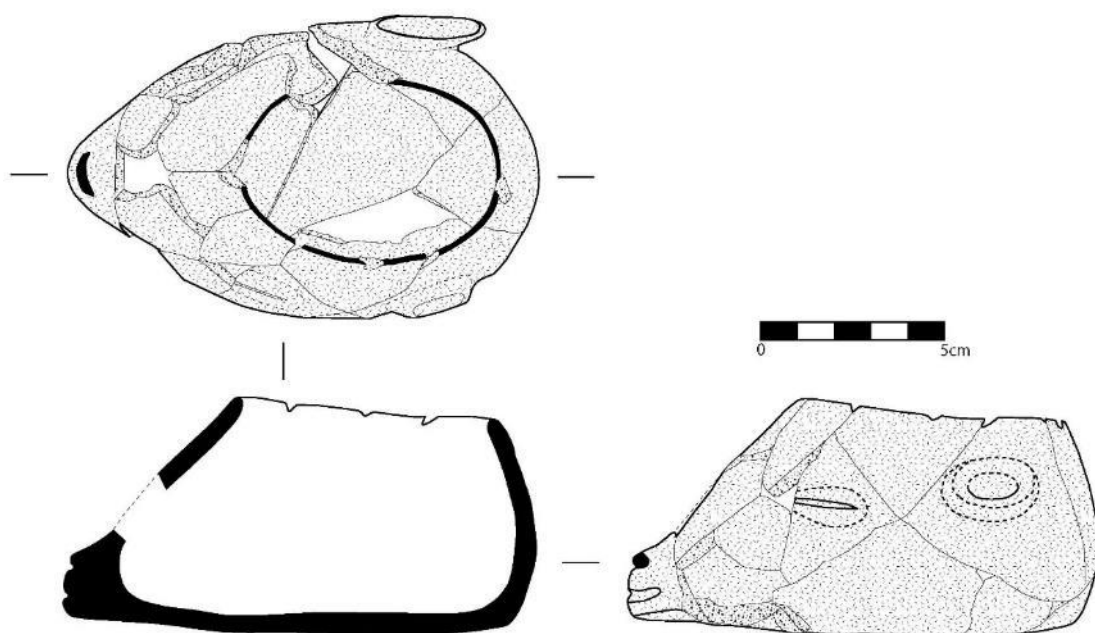


図 6 ラクダ科動物形土器